従業員が元気になれる職場づくり
～農業から地域を元気に～

愛西市　中野 悦宏さん
施設野菜（ミニトマト）

【平成 26 年 9 月 26 日掲載】

愛西市でＪＡあいち海部よつえ生産部会に所属し、ミニトマトを生産する中野悦宏さんを紹介します。中野さんは、ＪＡあいち海部青年部の部長を歴任し、地域農産物のブランド化に取り組むなど地域の活性化にも力を注いでいます。

心に焼きつく両親の姿

中野 悦宏さん

ほ場が自宅近くにあった中野さんにとって農業は生活の一部で、小学校からの帰宅後にほ場で過ごす時間も多かったそうです。また、「畑から充実した顔で帰宅する両親の姿が原風景として焼きついている。」と語るように、農業に対してマイナスイメージはまったくありませんでした。そのため、機械いじり好きが講じて自動車整備の仕事に就いた際も、常に実家の農業を気にかけていたそうです。最終的な就農のきっかけは、平成３年に母親が体調を崩したことでしたが、中野さんにとって当然の成り行きでした。

植物を育てるということ

中野家では当時 20ａの施設で大玉トマトを生産していましたが、中野さんの就農を機に 20ａのハウスを増設し、水耕でのミニトマト栽培を開始しました。就農後まもなく、父親からミニトマトの管理を全面的に任された中野さんでしたが、専門的な研修を受けることなく就農したため、病害虫の発見や地上部の管理が後手に回ることも多く、収量が部会平均の 50%に満たない年がしばらく続きました。

ほ場の多くは、水耕設備を利用した長期１作型栽培

「当時は、植物の状態も考えずに、人の管理を真似ていた。」と振り返るように、部会のほ場巡回で見た優良園地の肥培管理や温度管理をそのまま取り入れていたそうです。「今考えれば、生育ステージやそこに至るまでの管理が異なるので、うまくいくわけがない。」と笑いながら語ってくれました。

そのことに気づいてからは、暇さえあれば植物を観察するようになったそうです。さらに、水耕でミニトマト栽培を始めた中野さんでしたが、生育状況を確認するため、あえて土耕のほ場を新設しました。また、現在は、自家育苗にもこだわっています。「経営の効率化だけを考えれば、土耕や自家育苗は不要なものかもしれないが、従業員や研修生にも農業の本質を知って欲しい。」とその導入理由を教えてくれました。

家族経営からの発展

自宅近くの栽培ハウス。父親が建てたハウスを２年前に更新した。

中野さんは家族経営の中で規模を拡大させてきましたが、平成 18 年に大きな転機が訪れます。中野さんは平成 15 年頃から農業大学校の派遣研修生を受け入れていますが、現在も従業員として働いているＡさんが研修終了後に、就職相談に訪れたのです。中野さんは、「当時の経営面積では、従業員が将来的に家族を養っていくだけの給料を払うことは出来ない。」と考え、Ａさんの就職を断っていました。しかし、親を伴って再度相談に来た姿勢に絆され、就職を認めることになります。

その後、中野さんは「自分達家族だけなら我慢できるが、従業員に恥ずかしい思いはさせられない。」とＡさんの就職後 20ａのハウスを増設し、1ha 超のハウスでミニトマトを生産する経営体となりました。

働くことで元気になれる職場

広く快適な休憩所

「スタッフがそれぞれ考えて動いてくれるのが経営の強み」と話す中野さんの農園には、現在３名の従業員と 10 名のパートが在籍しています。また、そのほとんどが勤続５年以上で自分のやるべき仕事を認識しています。そのため、中野さんは細かな作業の指示に追われることなく、営業活動や労働環境の整備などに注力できているそうです。特に労働環境については、快適な休憩所を設置するとともに、気軽に雑談できるような雰囲気作りを心掛けており、「互いに助け合い、元気になれる職場」を目指しています。

従業員やパートに対して細かな指示は出さない中野さんですが、①プラス思考を持つこと、②勘考する（＝よく考え、工夫すること）ことの大切さについては、思いを共有できるようにしているそうです。「マイナス思考は行動を止めてしまう。また、勘考することで今ある経営資源が２倍、３倍の価値をもつ。」とその理由を教えてくれました。

農業から地域を元気に

農業が「植物を育てる仕事」だと実感する苗生産。

中野さんは自らの農園を元気にするだけでなく、地域全体の活性化にも積極的に取り組んでいます。平成 17 年にＪＡ青年部の部長を務めた際には、他の青年部員が栽培する水耕サンチュや自らが栽培するミニトマトなどの地域農産物をブランド化して販売する取組を開始しました。また、今年度からは青年部時代の仲間とともに地域で長年途絶えていた「農上がり（※)」を復活させました。

「農業経営を行う中で地域の多くの人に支えられていることを実感した。今度は農業で地域を元気にしたい。」と今後も地域の活性化に向けて取り組んでいく意気込みを語ってくれました。

※田植えなどの農繁期が終了した際に、その報告と今年の豊作を願う神事で、助け合って農作業を行った地域の人々が互いの労をねぎらう場にもなっていました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：海部農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2014, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.